

Project Based Learningで実践する市民性教育と言語教育： 「Communication Skills 聴く・話す」での取り組み

大 岩 彩 子

はじめに

本共同研究報告は、英語を外国語として学習する大学生の「市民性」形成を目指す言語教育の開発と実践をテーマに、筆者が敬和学園大学カレッジレポート「敬和学園大学英語の授業を通して養う国際性」（大岩、2017）で述べた3つの項目をふりかえる。加え、批判的教育論とモンテッソーリ教育論で論じられる、より良い社会を構築する為の市民教育について述べる。また Project Based Learning（課題解決型教育）に基づく動画プロジェクトの実践例を示し、学生の経験がどのように言語習得と市民性の形成に結びつくかを考察する。

1. 言語教育を通して養う「市民性」

市民性形成を目指す言語教育とは、言語学習を通して国際性を養うスキルが身につくよう実践ができる場であると考え。またそのようなスキルに焦点を当てた活動の中で21世紀の社会に必要な言語スキルを身につけられるカリキュラムだと考える。

言語教育の目標を学生の市民性の形成とするとあたり、敬和学園大学英語プログラムも「国際性を養うのに重要な3つのスキル：態度と思考、技能、認識」（大岩、2017）を習得できるプログラムであるべきだと考える。特に相互理解ができること、人権意識を持ち世界平和の為に行動ができること、そして世界の問題へ意識を向け、関わる力がある力を育てる教育を意識する必要がある。

この内容を記したカレッジレポート（大岩、2017）では、国際性を養う態度と思考として自己肯定、他人を理解し尊重する態度、自身の属するコミュニティへの誇りが「自分も他人も大事である」という認識を育てると説明した。意見、文化、宗教、政治、性など多様性を理解し受け入れることも国際性を養う為には必要不可欠である。平和と正義について考え意見を伝えること、地球は人類も含む動植物のホームとして認識し自然環境について学ぶことも国際性を養うには必要だ。

国際性を養う為のスキルとしていくつかの技能も必要である。問題解決能力とは問題の原因を探ったり対策を練るだけでなく、間違ったり失敗しても自身でやり直せる能力も含まれると考える。想像する力は今自分の身のまわりで起こっている事を超えて考える土台となる。この想像力こそが実際に行ったことのない場所にいる会ったことのない人たちの

抱える問題について考える力となり、様々な社会問題に対し敏感に「もし自分だったら」と考える力となる。情報やデータを批判的にみる目、即ち論理的に考え分析する力が必要である。言語能力も技能の一つであり、言語が使えるということは相互理解を促す力になる。必然的に起こってしまう対立や抗争はあるが、言語が使えるという事が相互理解を促し争う必要をなくすと考える。使える言語が多ければ物事の判断材料となる情報が増えること、同じ母語を話さない人とのコミュニケーションのためにはある程度の英語の能力が必要だという理由でも言語能力は大切な力である。

国際性を養う認識として、現実を知ること重要である。社会で、世界で何が起きているのかを知り、その社会の一部として自分には何ができるのか、地球市民として世界を少しでもよくするために何ができるのかを考える必要がある。意識を持つ、意識して知識を得ることが教養であり国際性であると考え。母語以外の言語を学ぶということはその背景にある文化を学ぶということで、言語教育を通して異文化理解を促す。さらに学生と教員が共に、そして互いからも学び理解するという大学教育での経験が民主的な学びにつながると思う。

2. Project Based Learning について

市民性形成を目指す言語教育実践の為に、学習者が活動を通し国際性を養うスキルが身につく、授業内の安全な環境でそれらのスキルの練習ができることが望ましい。と同時に 21 世紀の社会で「使える英語」を身につけられるような授業構成でなくてはならない。セオリーをプラクティスにつなぐ方法として、筆者は Project Based Learning (以下 PBL) を取り入れている。PBL とは課題解決型授業の意味で John Dewey (1938) が提唱した Experiential learning (経験学習) の論理に基づく。イタリアの教育者であり教育哲学者の Maria Montessori 医師も、1913 年 12 月にアメリカで行われた教育講演で、「行うことに子どもたちの学びの鍵がある」と提唱した。その講演がその後のアメリカの教育に大きな影響を与えた教育制度を変える起因にもなり、今日のアクティブラーニングとなったと言われている (立野、2019)。ここで重要なのはアクティブラーニングのアクティブとは行動的という意味ではなく「能動的」な学習を意味するということだ。

Dewey も Montessori も、人は活動しながら能動的に学習することで学ぶということを論じたが、さらなる共通点として学習を通して身につける問題解決能力や論理的思考スキルの重要性を語り、民主的教育、平和の為の教育 (森下、2016) という教育理論を言及している。また Dewey の経験学習理論から派生した Paulo Freire の Critical Pedagogy (批判的教育論) も民主的社会参加や市民としての権利を得る為の識字教育から始まったものであり (Freire、1992) 市民教育の先駆的発想と言える。

長い歴史のある学びの手段、そして市民教育のセオリーを 21 世紀のプラクティスにつなげる手法として、筆者は英語クラスに PBL を導入している。上記で説明したように市民性教育と経験学習理論は切り離すことはできず、市民性を養うことを目標とした言語学習には学習者が自ら問題を見つけ出し解決に向けて行動することを重視する PBL の学習スタイルは適していると言える。Gras-Velezquez (2020) の説明によると、PBL には様々なアプローチの仕方があるが、言語教育で取り入れられる際に共通して言えるのは

- 1) 問題解決に至る過程と成果発表を重視すること
- 2) 学習者が学びの主体となること
- 3) 一回の授業で完結せず長期的に取り組むこと
- 4) 多様なスキルを使うこと
- 5) 内容と言語どちらの習得も目標とすること
- 6) 共同活動、個人活動のどちらも必要とすること
- 7) 学習者が自身の学びに責任を持つこと
- 8) 学習者と教育者が新しい形の役割と責任を持つこと
- 9) 最終的に出来上がるものや成果の発表があること
- 10) 最後に過程と成果発表の振り返りを行うこと

ということである。Coperias-Aguilar (2020) は PBL を言語教育の現場に導入したものを Project-Based Language Learning (問題解決型言語教育) と呼び、言語教育の場で学習者同士の共同学習、学習者中心の学び、さらに教育者と学習者が情報や学びそして「力」を共有することを意味すると述べる。また PBL を取り入れた言語学習は学習内容が重視され、共通認識の目標に向かって共同学習をすることが土台となると述べる。最終的なプロジェクトの成果はクラスの外に対しても影響がありコミュニティの一部となるような活動である、と説明している。Stoller and Myers (2020) は PBL 形式の 5 段階構成をこのように説明している。

- 1) 準備 (プロジェクトの説明、テーマ・トピック設定、計画)
- 2) 情報収集と Scaffolding (教育者が足がけとして介入する)
- 3) 情報処理 (情報分析、整理)
- 4) 成果発表
- 5) 振り返り

次のセクションでは授業で行ったプロジェクトをこの 5 段階の枠組みに沿って説明する。

3. プロジェクトについて

3.1 対象クラスと学生

2年次を対象に後期開講している Communication Skills B2（聴く・話す）レベル2は週90分授業2コマ（4単位）の授業で、自信を持って話すことに加えソフトスキルの練習を目標とし、テストなどは行わず毎ユニット短いプレゼンテーションを行うPBL授業構成であった。プレゼンテーションの準備や発表のパフォーマンスを評価し、振り返りを含む自己採点も成績の一部とした。この授業の目標はアカデミック英語の習得やアカデミック発表ができるようになることではなく、将来仕事で使える英語、コミュニティで役に立つ言語スキルの習得であった。後期履修者は24名おり、内4名は国際文化学科の学生で選択科目として履修している。24名中3名は人前で話すことや他人とコミュニケーションをとることを困難に感じる特性があり多様性に富んでいる。

前期から引き続き Impact Issues レベル3という教科書（Day, 2019）を使用した。トピックは様々で「環境問題への意識の違い」というような社会的な問題から「整形手術についてどう思うか」「友達と恋人の境界線」のような個人的な意見を述べる内容もあったが、教科書の構成が

- 1) トピックに関する会話を聴く（リスニング）
- 2) 進出単語とフレーズの確認（単語、熟語、文法）
- 3) 教科書内で様々な意見を聞き（リスニング）自分は賛成か反対かを考える（スピーキング）
- 4) トピックについてクラスメイトの意見の傾向をリサーチする（スピーキング）
- 5) 自分の意見をまとめ発表する（スピーキング）

という流れになっており、リスニング・スピーキングの練習を通し「意見の多様性を受け入れる」練習も兼ねていた。また毎トピックで3分程度の発表をすることでクラス全員の意見を聴きメッセージを受け入れる練習を重ねた。後期に入り、前期と同様の流れで発表もしたが、自分たちのメッセージをクラス外に発信したいという思いが湧き、教科書のトピックに沿った「自分にとって友人は大切か」という内容の発表の代わりに「困った時は友達に頼ろう。この様なシチュエーションならこう言えばいい。」というメッセージとバイリンガルのフレーズ集をポスターにし学内に貼ることを思いついた。英語学習者が英語フレーズを覚えられるという利点の他にも、留学生が日本語の学習になるようふりがなをふり、またコミュニケーションを取ることが苦手だったり人をお願いをしたりするのが苦手な学生の役に立つようになるようにと考えての案だった。それぞれのフレーズはシチュエーション別に Quizlet¹⁾ にリスト化し、ポスターにQRコードを貼り付けることで実用化を計った。

3.2 動画プロジェクト

1) 準備

ポスター作成のように、学生が発信したいメッセージの相手がクラス外に向いてきたことを受けて、その次のユニット“Starting a Family”ではさらに先である学外へメッセージを発信してみないかと提案した。プロジェクトはメッセージ性のある動画を作ることとした。

2) 情報収集と Scaffolding

“Starting a Family”のユニットのリスニングは結婚しているカップルの会話で、不妊治療をしても子どもができないこと、今後治療を続けるか養子縁組を考えるか悩むという内容である。リスニングの後で不妊治療について知っている事をマインドマップで書き出したがあまり知識がないことがわかり、課題として調べる事とした。また日本の養子縁組の制度に関しても知らないことが多いと分かり、課題として調べた。不妊以外にも「欲しいけど子どもを持つことができない」状況があるのではないかと、というグループの意見を受けそれぞれのグループでそのような状況をマインドマップを書いて考えた。金銭的状況、職場の理解のなさ、LGBTである事、不妊以外の疾患や遺伝など様々な理由で子どもを産めない、持てない、許されていない人がいるのではないかとという意見がでた。この活動中、教員は学生の話し合いに加わったりグループ内での意見を発表する際ファシリテートをしたりした。また Scaffolding として、クラス全体で情報を共有するファシリテートをし、また話し合いに必要な表現を教え英語での話し合いが成立するよう支援し介入した。

トピックについてクラスメイトの意見の傾向をリサーチする活動は「理想の家族像」に関する内容だった。日本社会に置いて、特に女性は「まだ結婚しないのか」、「子どもはまだか」などと言われる事が多く、今後自分たちも理想とプレッシャーの間で悩むかもしれないという意見があった。所謂「普通」以外の生き方を選んだ時の社会的プレッシャーについての話し合いもあった。学生の年齢が低いことから実体験が少ないため、担当教員自身の体験や家族友人の経験、言われ傷ついた言葉を伝えた。決して人ごとではなく多くの人が経験していることで、社会の認識が変わらなければ恐らく学生たちもこれから経験することだと伝えた。クラスメイトの意見の傾向を探る為に考えた質問には、「将来結婚したいですか」「子どもは欲しいですか」「自分の姓を変えたいですか」「子どもが生まれた後も働きたいですか」「里子や養子も考えますか」「不妊だとわかったら治療をしますか」というように、Lifestyle というより Life choice であることに気付いた。そしてそこには常に Dilemma (ジレンマ) があるという話し合いが行われた。

このユニット内で行なった一つ目の新しい試みは、Communication Skills B2 クラス

1 というレベルでいうと1つ上のクラスとの合同授業である。クラス1はアカデミック英語の習得と発表スキルの習得を目標としているクラスなので、クラス2の授業内容に合わせ「ジレンマ」と「価値のパラドックス」について調べてもらい、クラス2の学生を相手に講義とワークショップを行ってもらった。TED²⁾から選ばれたプレゼンテーションを使用した講義を聞き、グループワークに参加した。その後感想、改善点などを記すフィードバックを行なった。

3) 情報処理

次の段階はいよいよ動画制作である。今まで話し合ったトピックの中から一番興味のあるものを選び、その段階でチームメイトが決まり、1人から3人で構成された10グループができた。グループで「誰に」「どんなメッセージ」を伝えたいのかを考え、そしてそのメッセージが伝わる動画制作する事とした。自分たちで設定したテーマとメッセージをまとめるため必要な情報を整理した。追加的に学習すべき項目を列挙し今後の準備工程を検討した。また動画のスタイルも各グループに任せメッセージを伝えるのに有効であり自分たちで作ることが可能な形態であれば自由とした。メンバーが出演しメッセージを訴える方法が2組、街頭インタビューを含むテレビ番組風の動画が1組、それ以外はスライドに音声を乗せる方法を選んだ。

プロジェクトの内容と工程はそれぞれ違うため、完成の目処となる日にちから逆算してグループそれぞれの計画をたてた。動画プロジェクトが始まってからの授業日はまず講師にその日の予定を伝え最後に進捗状況を報告することとした。明確な目標のもと自立した共同学習を行なったが、内容、英語に関する質問があれば聞きにくる、もしくは呼びに来ることとした。講師に準備して欲しいものや確認してほしいもの(台本、スライドなど)があれば事前に伝え Google document または Google slide で共有すること、と約束をした。台本は講師のチェックを受けてから練習し、音声を録音するグループは授業時間内外で時間を予約し行うとした。録音をする際は台本を細かく分割して行うため、発音や文法の間違ひがあれば適宜個人指導した。

4) 成果発表

期限までに全グループが動画を完成させ、授業時間に全員で動画を鑑賞した。動画の最終編集は教員が行なったため出来上がった動画を見るのはこの場が初めてだったグループも多くあった。完成したものの出来栄を確認してから、自分たちの動画の取り扱いを決めさせ、(1)学内での回覧(学生と教職員のみ)を許可する (2)オンラインでのアクセスを許可する (3)クラス以外での視聴は許可しない、と決めた。(2)を選択したグループの動

画のみのチャンネルを作り、リンク³⁾を共有し、担当教員の個人 SNS で活動とリンクを含めた記事を投稿した。

5) 振り返り

動画視聴後、オンラインアンケート Google Forms を使用し、過程と成果について振り返った。過程に関してはこのプロジェクトを通して学んだ内容、言語スキルに加えグループメンバーとの関わりや貢献度、教員から十分な支援があったかななどを質問した。成果については自分が良いと思う動画の部分、改善したい点、自己評価点を設けた。教員も、プロジェクトの過程と成果を評価しフィードバックした。

4. 考察

本稿での実践は、受講者の「市民性」を育成することを目標とし、教材のトピックを広げ、PBL という方法論を設定して実施した。また設定したプロジェクトの過程でディスカッションを行ったり動画のセリフを練習したりするという能動的なアウトプットが行われることで受講者の英単語、フレーズ、文法、発音の定着を狙った。

4.1 言語習得

振り返りではアンケートに答えた 20 人全員が単語を学んだと答えている。扱ったテーマによるが「不妊」「体外受精」「養子縁組」「里親制度」「ジレンマ」「パラドクス」「雇用均等法」など日本語でもその単語の意味を説明するには調べる必要がある単語を学ぶ必要があった。単語を学んだ、というのはただ単に日本語の単語の対訳を暗記したということではなく、背景にある社会制度、文化、歴史、問題点を考え理解したという認識であろう。

半数が新しい文法を学んだと答える中、表現と発音は半数よりやや多い数であった。その中でも音声を録音したグループのメンバーは 13 人中 10 名が発音の勉強になったと答えている。このスタイルで動画を作成したグループはまず発表用スライドとナレーション用台本を作り、担当教員が細かく添削をした。次にスクリーンキャストオーマティック⁴⁾という動画キャプチャサービスを使用し、グループが作ったスライドを動画として録画した。スクリーンキャストオーマティックにはナレーション録音機能があり、録画像に合わせて 1 行ずつナレーションを録音・編集できる。録音の際に間違っても 1 行ずつやり直しができるため、録音グループに関しては担当教員が発音を細かくチェックすることができた。動画像にするために音声を録音するというのは担当教員にとっても初めての試みであり、このクラスの一人一人の発音を正し指導することも初めてであった。クラス内発表では感じなかった発音を正す必要性を相互で理解し取り組むことができたと感じた。

4.2 概念、価値観

振り返りアンケートでは「このプロジェクトを通して何を学んだか」という記述式の項目を設けた。以下の受講者コメントの抜粋から分かるように、受講者の答えは大きく3つ：language and delivery（言葉の伝え方）、content（内容）、concept and values（概念や価値観）に関するものに分類される。

language and delivery	<p><i>"If you want to tell children about something, you should choose simple words, not difficult (words)."</i>（子どもに何かを伝える時はやさしくわかりやすい言葉を選ぶことが大切だ。）</p> <p>“大切な話でも長くて難しい内容だと、興味がそそられないし理解し辛くなる”</p> <p>“映像は使っている人、見ている人両方を楽しませるべきものだと考えています。短時間で楽しめる映像を目指しました。”</p>
content	<p><i>"Men could cause infertility."</i>（男性にも不妊の原因があるということ。）</p> <p><i>"Realizing my ideal life and family relationships is very difficult."</i>（理想のライフスタイルと家族関係を両立するのは難しいかもしれないということ。）</p> <p><i>"I learned the freedom of marriage or not (to get married)."</i>（結婚するもしないも自由だということ。）</p> <p><i>"I learned adoption and foster care system's details. Furthermore, I learned the ways to deliver important messages."</i>（養子縁組と里親制度について学んだ。さらに、伝えたいメッセージを伝える方法を学んだ。）</p> <p><i>"(I learned) about fertility treatment."</i>（不妊治療について学んだ。）</p> <p><i>"(I learned) about working women's rights, history and systems."</i>（働く女性の権利、歴史、制度。）</p> <p>“世の中に知られてないことはたくさんあること”</p>
concept and values	<p><i>"I found there are various choices."</i>（たくさんの選択肢があるとわかった。）</p> <p><i>I learned personal freedom should be respected more, and I should broaden my mind."</i>（個人の自由は尊厳されるべきだということ、自分の視野を広げるべきだということ学んだ。）</p> <p><i>"It is important that I understand the feeling of various people."</i>（色々な人の気持ちを理解することが大事だ。）</p> <p><i>"I learned the importance of understanding various life(styles). 様々な生き方を理解することの大切さを学んだ”</i></p> <p><i>"I learned there are many choices involved when starting a family, for example, marriage, fertility treatments and adoption."</i>（家族を持つということは、例えば結婚、不妊治療、養子などの選択をするということ学んだ。）</p>

履修者が記したこれらのコメントを「国際性を養うのに重要な3つのスキル：態度と思考、技能、認識」（大岩、2017）と合わせて考察する。言語習得の項目で述べた学びに加え、受講者はどのように言葉を選び伝えるかを考え学んだようだ。気の知れたクラスメイトや授業担当者に伝えるメッセージではなく、目の前にはいないが「伝えたい人たち」を意識したメッセージとして作った動画だからこそその学びだったのではないかと思う。「より良い動画にする為に変えるなら、どの部分を変更したいですか」という質問項目に *"I'm worried whether our message reaches the audience well."* *"Anxiety that the audience understands properly."* というような、自分たちのメッセージが果たして伝わるのかという不安が残るといったコメントもあった。動画という一方通行のメッセージという特殊な媒体だが、「伝える」に留まらず「伝わる」ことを意識したことは大きな成長だと考える。

扱った内容についての見解を深めたという意見も多く、このプロジェクトには情報やデータを批判的にみる論理的と分析する力を養う要素が含まれていたと考える。テーマを決め調べる中で、世界では何が起きているのかを知り、自分にできることとして動画メッセージを作成した。“世の中に知られてないことはたくさんあること”を学んだというコメントも印象的である。意識を持つ、意識して知識を得る、そして知らないことが多いと認識することを、このプロジェクトを通し体験したと言える。

多様性を理解し受け入れることの重要性や自分らしい選択をする権利について学んだと記した受講者も多かった。他人を理解し尊重する態度、他者の意見、文化、性、ライフスタイルの多様性を理解し受け入れる態度を養うという点でこのプロジェクトは意味があったと考える。

おわりに

Montessori は、教育とはより良い社会を構築する為に行われ、世界平和、調和的社会的実現を目的とすると語った（森下、2016）。それは大学教育においても、言語教育においても、英語教育においても変わらない教育の本質であろう。そして本稿で述べた PBL に基づく動画プロジェクトの実践例をとって見ても、外国語としての英語教育を通して大学生の「市民性」形成を目指す言語教育の実践は可能であると考えられる。また学習者と教員が共に、そして互いからも学び理解するという大学教育での経験が、これから社会に出ていく若い citizen の民主的な学びにつながると考える。教室という安全な場での実践を糧に平和な社会を構築する人材になってもらいたいと願う「希望的教育論」（Freire、1992）に基づき、市民性の形成や民主的教育を教室単位で行うことが、私たち一教育者のできる草の根的平和活動ではないだろうか。

【謝辞】 本研究は敬和学園大学人文社会科学研究所研究補助費によるものです。アンケート等に協力していただいた当該クラス履修者みなさんにこの場を借りて御礼申し上げます。

註

- 1) Quizlet とは無料の学習ツールでオンラインやアプリで単語帳が作れるものである。以前から授業で使用していたので使い方には慣れていた。
- 2) TED もしくは TED Talk と呼ばれ、アメリカのメディア組織 TED Conferences LLC が無料で配信している講演のシリーズである。英語の授業で頻繁に教材として使用している。
- 3) 公開可とした学生の動画は <https://screencast-o-matic.com/channels/cq10e5sLd> で閲覧できる。
- 4) スクリーンキャスト オーマティック (Screencast-O-Matic) はデスクトップ上の動きや操作を録画 (キャプチャー) できる動画キャプチャーサービスである。学生の動画は Screencast-O-Matic のサイトで公開した。

参考文献

- Coperias-Aguilar, M. J. (2020). Diversity and second language acquisition in the university classroom: A multilingual and multicultural setting. In A. Gras-Velazquez (Ed.) *Project-based learning in second language acquisition: Building communities of practice in higher education*. New York: Routledge.
- Day, R. R., Shaules, J. & Yamanaka, J.(2019) In M. Rost (Ed.), *Impact Issues 3 (3rd ed.)*. Tokyo: Pearson Japan.
- Dewey, J. (1938). *Experience and education*. New York: Macmillan
- Gras-Velazquez, A. (2020). Introduction. In A. Gras-Velazquez (Ed.) *Project-based learning in second language acquisition: Building communities of practice in higher education*. New York: Routledge.
- Freire, P. (1992). *Pedagogy of hope*. New York: The Continuum International Publishing Group Inc.
- Grazioli, B. (2020) Social activism Italian style: Building a community of practice through language immersion and civic engagement while studying abroad. In A. Gras-
- 森下京子 (2016). 「モンテッソーリ教育の内容・方法の概容と今日の実践が引き継ぐもの」。現代に生きるマリア・モンテッソーリの教育思想と実践. KTC 中央出版.
- 大岩彩子 (2017). 「国際性を重視した豊かな英語教育の実現に向けて」。敬和カレッジレポート 第 89 号 2017 年 12 月号 (p.1-3)
- Stoller, F.L & Myers, C.C. (2020). Project-based learning: A five-stage framework to guide language teachers. In A. Gras-Velazquez (Ed.) *Project-based learning in second language acquisition: Building communities of practice in higher education*. New York: Routledge.
- 立野由美子 (2019). 「自信を育てるモンテッソーリ」。クーヨン 2019 年 9 月号 (p.39- 41).
- Velazquez (Ed.) *Project-based learning in second language acquisition: Building communities of practice in higher education*. New York: Routledge.